

10年後の北海道のために

“今” 必要な

若者のチャレンジを考える

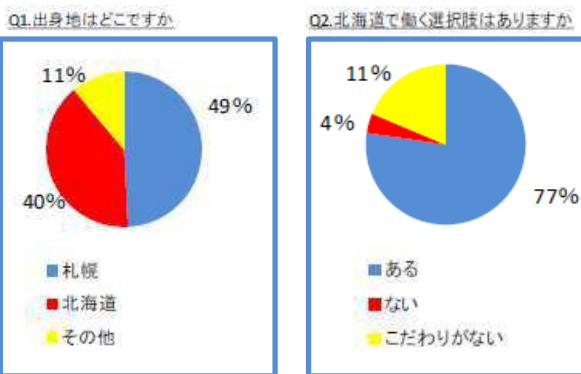
NPO法人北海道エンブリッジ 浜中 裕之氏

今日は、10年後の北海道のために“今”若者達にどういった機会を提供していけばよいのか、について事例を交えてお伝えしたいと思っております。

若者が仕事に求めていること

昨年、大学3年生の75人にアンケート調査を行いました(下図参照)。「何があれば北海道で働きたいですか」という質問に対して、給料が高いことや安定している企業であることは、意外と関心が低く、一番重視されているのは、どういう人と働くのかということ、何をやるのかということでした。やはり若者たちはまだ仕事自体に実感が持てないので、誰の役に立てるのだろうかとか、その仕事はどう社会に影響を与えていくのかということに

■道内大学生75人に聞いた仕事に対する志向性



(NPO法人北海道エンブリッジ 2017年度調査)

関心が強いことがわかりました。

つまり、そういったやりがいや企業

さんが若者に対して示していけると、

若者が地元に残ろうという選択肢を持

てるのではないかと思います。

若者と企業をつなぐ

我々は若者の希望や志望に応じて、

企業や団体・人を紹介し、繋がりをブ

リッジする取組をおこなっています。

いくつか事例をご紹介します。

プロフィール

昭和60年留萌市生まれ。平成16年、北海学園大学経済学部入学。大学2年生時、札幌のベンチャー企業でのインターンシップに参加。その後、友達や先輩に半年以上の長期インターンシップをコーディネートする取組を行う。インターンシップを行なう中で、学生の目が輝いていく瞬間や、企業側に「もっと若者に任せていこう」という風土ができる姿を見て長期インターンシップのコーディネートを開始。平成19年(大学4年生時)、経済産業省「チャレンジコミュニティー創生プロジェクト」特別研究員に認定される。NPOを設立し長期実践型インターンシップの事業化をめざす。平成24年、NPOを法人化。取組開始から12年が経過した現在は全国50地域と連携しながら取組を進めている。



事例紹介1：農業

一つ目は、高橋農産さんとの取組です。都心部の大学生が、畑での収穫作業と、原料の買取、加工、販売の一連の流れを経験するという人気のプロジェクトでこれまでに126人の学生が参加しています。

参加した学生達は収穫した作物や製品化した商品をお客様に届けた瞬間に農業って面白いと言いつつ始め、これまで、札幌大学や教育大学など、農業とは直接関係のない分野の大学からの新規就農者が2人、農家への就職者が1人います。この取組に関しては、明治大学、慶応義塾大学、愛媛大学など道外からも問合せがある人気のプロジェクトになっています。

都心部の若者が農業に関わる環境をつくる
(当別町：高橋農産)

畑では収穫作業を行い時給を受け取る。その後農家から原料を買い取り、加工、販売まで手がける。値付けや人件費の計算、何回くらい売ればペイするか学生自ら計算しながら決定していく。



事例紹介2：グローバル

続いては東京大学、横浜国立大学など本州の方からの応募が多かった海外展開の事例です。札幌でゲストハウスを展開している(株)FULLCOMMISSIONとのプロジェクトに小樽商科大学の学生が取り組んでいます。

ミッションは東南アジア一号店のオープンのためのベトナム現地法人の立上げと物件の調達で、資金として2千万円まで使用可能となっています。このプロジェクトは、最終的にプレゼンテーションで先述の小樽商科大学の学生が勝ち取りましたが、面白いプロジェクトを打ち出せば、全国各地からも手を挙げる若者がいるということが分かってきました。

海外でのプロジェクト<進行中>
(札幌市：(株)FULLCOMMISSION)

現在派遣されている学生は大学を一年間休学し、道の「トビタテ！留学JAPAN」※の仕組みを使ってベトナムへ渡っている。平成29年11月に物件の契約まで進み、引き続き現地法人の設立と、オープンをめざしている。この企業とは東南アジア二号店、三号店の開業に向けても取り組んでいる。



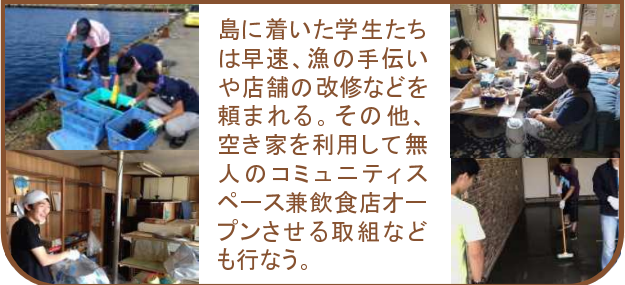
大学との連携

より広く、実践型のインターンシップを大学生に伝えていくため、小樽商科大学、札幌市立大学、千歳科学技術大学、北翔大学、旭川大学と連携しながらインターンシッププログラムを作る取組を行っています。

北海学園大学とは単位化された地域協働フィールドワークという授業を行っています。内容は、大学生が天売島で2週間自給自足をするというプログラムです。島民には学生が行く前にIP電話で、色々な仕事を任せてくださいと呼びかけます。参加した学生からは、島民に感謝をされた時に初めてこの島を何とかしたいこうという思いが生まれたと話しています。

天売島での地域協働フィールドワーク
(北海学園大学)

島に着いた学生たちは早速、漁の手伝いや店舗の改修などを頼まれる。その他、空き家を利用して無人のコミュニティスペース兼飲食店オープンさせる取組なども行なう。



つまり、これを伝えたい！！

10年後の北海道に必要なのは当事者の視点

インターンシップという言葉は広がっていますが、学生が消費者目線で参加していくことが多いです。しかし我々はインターンシップの真義はそうではないと考えています。

入った組織で生産活動を行い、生産者の視点を身につけ、自分がここで価値を産めたという意識を持つことで学生はその組織の「当事者」になります。先の天売島のプログラムを終えた学生の意見が正に当事者の視点です。このように「消費者」から「生産者・当事者」への視点の切り替えを持たらすのがインターンシップであり、この**当事者の視点を持つ若者**が増えることが、北海道をフォローしていく人が増えることにつながります。

北海道の強みは、現場と都市が近い環境にあることと、自然や資源のみならず地域課題も豊富なことです。今後は、この中で、若者達に価値を創る経験・当事者の視点をもたらす経験をどれだけ提供できるかが重要になってきます。

我々としては、地域と若者をコーディネートできる人を現在の2名体制から、どれだけ増やしていけるかという直近の10年間で取り組んでいこうと思っています。



夢、おこす村
にしおこっぺ



村民一人ひとりが輝き「夢叶う」村へ

にしおこっぺ
～西興部村 しごとの創出と美しく住みよい活力ある村づくり～

住民全員がプレイヤー

夢を抱ける村をめざした住民と村の取組

加速する人口減少 住民と村の思い

北海道オホーツク地方の北西部に位置する西興部村。この村では、昭和初期以降、基幹産業である林業と酪農の衰退とともに人口減少が加速し、昭和10年代のピーク時には約5000人だった人口が昭和60年代には1500人以下まで減少しました。

村は、住民が安心して生活できるための村づくりを進めるためにはまず雇用の創出が必要であると考え、どのように村に雇用を生み出すかについて、住民や地元有志との対話を何度も重ねました。

わが村に産業を① 公設民営の福祉施設

雇用の創出と同じく、当時、村で力を入れようとしていたのは「福祉の充実」です。村で生まれてから死ぬまで安心して生活を送るために福祉は最重要であると考えました。

福祉施設の設置について、住民や地元有志と何度も話し合った結果、村で建設する特別養護老人ホームの運営を地元有志で設立した社会福祉法人「にしおこっぺ福祉会」が行うことで合意しました。

理事は無償のボランティア。設立当初は福祉施設運営のノウハウなど当然なく、施設運営のノウハウがある人材や介護士資格を持つ人材などを探すところから始める必要がありました。

当時は役場や住民という立場を乗り越え、お互いに当法人の運営が軌道に乗るまで様々な作業に取り組みました。

昭和63年の特別養護老人ホームの設立から約30年が経った現在

当法人が運営する福祉施設は、特別養護老人ホーム、ケアハウス、知的障がい者更正施設、グループホーム5施設の計8施設になりました。経営も安定し、地元からの雇用のほか、当法人で働くために移住して来た方の雇用も増えました。法人と村が一体となり取り組んだ結果、「福祉の充実」と「雇用の創出」が同時に叶えられたのです。



昭和63年に設立された特別養護老人ホーム「にしおこっぺ興楽園」の外観(上)とリビング(下)

特別養護老人ホーム設立と時を同じくして、村産業の柱の1つを担っていた木材加工会社が、外国産材の流入等により、やむを得ず閉鎖する事態となりました。

「村の基幹産業を衰退させてはいけない」との思いを実現するため、この会社の製造部門の1つであったエレキギターのボディ原盤（道産シナ材）に着目し、さらに高度化させ、塗装を含めたエレキギターのボディ製造までを行う「オホーツク楽器工業株式会社」を村と地元有志の共同出資により平成2年4月に設立。

村の木材産業再興や雇用確保をめざした事業がスタートしました。

道内では初めてのエレキギターの塗装を含めたボディ製造は、より高度な技術が必要とするため、始めは失敗も多く、軌道に乗せるには大変な時間がかかりました。しかし、同社に集まった「ギター

社会福祉法人にしおこっぺ福祉会

- 法人設立
昭和63年3月
- 主な事業
特別養護老人ホーム「にしおこっぺ興楽園」
知的障害者更生施設「清流の里」
ケアハウス「せせらぎ」
グループホーム「ピアI」などの運営
- 全体従業員数 123名
うち村出身者 50名
うち村への移住者 61名
うち村外からの通勤者 12名

わが村に産業を②
第3セクターの楽器製造会社設立

を作りたいたい」という熱意を持った若者達が、様々な苦難を乗り越え、堅実に技術を積み重ねていきました。

そして現在！

同社の経営は安定し、当初25名で始めた社員も現在38名まで増員されました。熱意を持った同社の社員は、自分達が手掛けたギターが日本及び世界のミュージシャンや若者達に演奏されていることを喜びとし、日々、技術の向上に努めており、このことが同社の安定経営の基礎となっています。

また、社員のうち、約9割が20〜30代の移住者で占められている同社は、高齢化が進む村の就業人口の中で、過疎化防止の一翼を担う貴重な就労の場としての役割を果たしています。



オホーツク楽器工業株式会社のボディが使用されたギター(右)
ギターのボディにやすりをかける光景(左上)と塗装作業の様子(左下)

オホーツク楽器工業株式会社

- 会社設立
平成2年4月
- 事業内容
エレキギターの原板・ボディ・ウクレレ製造
- 年間売上額(H28年度)
約2億9120万円
- 全体従業員数 38名
うち村出身者 3名
うち村への移住者 33名
うち村外からの通勤者 2名

産業の創出とともに進める
美しく住みよい活力ある村づくり

雇用の場の確保とともに、住民が村で安心して暮らせるよう、村では住宅建設に係る助成や子どもの医療費無料化など様々な支援を行っています。

自然減が多いにも関わらず、産業の創出や各種支援制度によって社会増がそれをカバーしており、村の総人口はほぼ横ばいで推移しています。

村の総人口の推移



Point!

村の各種支援制度

- <住まい>
持ち家1棟建設につき200万円助成
持ち家のリフォーム経費1/2(上限100万円)助成 など
- <子育て>
子が18歳に到達するまで医療費無料
子を出産した世帯に助成(10万円(第1子)~100万円(第4子))
学校給食全て無料、新生児への木のおもちゃプレゼント など
- <働く>
起業に必要な事業経費の3/4(上限300万円)助成
福祉施設で勤務しようとする者への奨学金や就職準備金の貸付(主体:にしおこっぺ福祉会) など



夢を叶える村
起業家支援の取組を開始

住民とともに新たな産業を生み出すことに成功した西興部村。さらに新たな産業・雇用を生み出し、地域経済の好循環を作り出すため、村では平成23年度から新たに起業をめざす人に対して事業費の助成を行っています。そして、この助成を活用し、移住者2名を含む5名の方が平成28年度までに起業しました。

小さい村だからこそ可能だった住民と行政による地域産業創出の取組は起業者支援も加わり、新たな展開を迎えました。村では、引き続き「産業の創出」と「美しく住みよい活力ある村」をめざした各種取組を進めることとしています。



—お客様に合う唯一の家具をつくりたい

夢に向かう人 ～西興部村で活動する移住者～

File1 「家具紡木」代表 小林 直人 氏

[小林直人profile]

東京都出身。

首都圏の家具メーカーで就労していたが、自然豊かな場所で生活したいという思いから北海道への移住を考え始める。平成25年に家具メーカーを退職し、知り合いから紹介された西興部村に移住。



[家具紡木 (つむぎ)]

北海道に移住した小林氏が開業した手づくり家具のお店。「家具紡木」という名称は、「糸を紡いでいくように丁寧な仕事をしたい」という小林氏の思いから名付けられた。テーブル、イス、ベンチ、子供家具などをオーダーメイドで製作。

住 所：紋別郡西興部村上興部42番地

TEL：0158-85-7581

URL：http://tumugi2012.com

私は東京都出身ですが、自然が大好きで、家具メーカーに就職したあとも、いつか自然と共に生活してみたいという気持ちはずっと持っていました。そのような中、7年前ぐらいに知り合いが西興部村に移住したんです。それで、その知り合いから話を聞いているうちに西興部村に興味を持った、というのが西興部村に移住するきっかけでした。村に来てまず思ったのは、自然がいいな、ということ。北海道の他の地域は詳しく知りませんでした、すぐ気に入りました。いいところです。

そんな自然に囲まれた村で、私は平成26年から手づくり家具のお店「家具紡木」を開業しました。道内産の木を使っているのですが、ここはやっぱり木がいいですね。暖かい気候で育った木より、木目が細かくて綺麗ですし、繊細です。私はこういった道内産の木を使い、お客様のイメージを体現したその方だけの家具を製作することを大事にしています。

お客様のニーズを時間を掛けて細かく調査し、お客様の思っているとおり家具を丁寧に作る。そしてお届けした後でも、少しでもそのイメージと違えば、こちらに送り返していただいて、改修などのオーダーに応じています。

家具というのは、ほとんどが家の中で毎日見るものです。また、オーダーメイドで買う方には、それなりの思いや大切な出来事があると思っています。

だからこそ、お客様が日常で違和感を感じず、長く使える家具をつくりたい。

そのため、デザインもあまり奇抜なものにはしません。時代が変わっても、ずっと残るような家具を製作することを心掛けています。

そしてその家具をお客様に納めた時に、喜んでいただける瞬間が私の喜びです。

そんな私の活動を西興部村の皆さんは家族のように気遣い、見守ってくれています。この村で生業を営みながら、そんな村の皆さんに何かしらの形で恩返しをしていきたいというのが、私のこれから叶えたい夢です。

― 捕獲したシカの生命に責任を持ちたい



夢に向かう人 ～西興部村で活動する移住者～

File2 NPO法人 西興部村猟区管理協会 伊吾田 良子 氏

〔伊吾田良子profile〕

茨城県出身。
夫（当時は交際中）が、「西興部村猟区管理協会の運営に関わって欲しい」と北海道に住む親類から依頼され、平成18年に夫と2人で西興部村に移住。現在は西興部村猟区管理協会に所属しながら、シカの皮の活用に特化した「deer leather project」を立ち上げ、シカ革製品を製作し、道の駅やイベント等で販売している。



NISHIOKOPPE
WILDLIFE
ASSOCIATION

〔西興部村猟区管理協会〕

西興部村において、エゾシカの有効活用を実践しているNPO法人。狩猟により、エゾシカの個体数を管理するほか、新人ハンターセミナーやエコツアーなどを企画・運営。また、捕獲したエゾシカの肉以外（皮・角など）の有効活用をめざし、それらを用いた製品などの製作も行っている。

住 所：紋別郡西興部村西興部485番地
TEL：0158-87-2180

村に移住してまず驚いたのは家のすぐ近くでシカを発見したことですね笑。とても自然豊かな場所だな、と思いましたが、あと、移住した日が村の盆踊りの日で、そこで村の人達と知り合い、住民の方がとても温かいという印象を受けました。

村に住んでから、私は西興部村猟区管理協会に所属し、シカの皮を有効活用するために、自ら皮をなめし、シカ革製品を製作しています。

シカ革は柔らかくて軽く、しなやかさもあるのが特徴です。今はキーホルダーやコインケースなどの小物を作っていて、シカ革は柔らかくて軽く、しなやかさもあるのが特徴です。今はキーホルダーやコインケースなどの小物を作っていて、

道に若い方が興味を持ってもらえる感じ、最初にシカ革製品に触れたお客さんの反応はやっぱり「柔らかい」と「軽い」です。

このシカ革ですが、なめして製品にするまでには約2ヶ月程かかります。さらに時間が掛かった割には作業途中で皮に穴が空いてしまったりと大変な作業です。しかし、いくら大変であっても、とても大切な作業です。

我々は1つの命を奪っています。だからこそ奪った命の全てを無駄なく活用することが我々の責任であり、この村での私の使命だと思っています。

ただ、1年間に村で捕獲されるシカが数百頭に上るのに対して、現在、我々が革製品として加工出来ているのは20頭程度です。シカ肉はジビエ料理に活用されますが、シカ皮はほとんど捨てられています。これが現状です。

これからシカ皮をより効率的に加工できるような工房を村で建設する予定なので、完成した時には、より多くのシカ革製品を作り、シカ革の魅力をたくさんの方に伝えていきたいです。

シカを資源として捉え、人と野生動物がこの村で共存できることが私の夢です。シカを捕獲し、捕獲したシカは命を無駄にしないよう全てを利用する。パランスがとても難しいとは思いますが、そのような村に近づけるよう活動を続けていきたいです。